ガウデンツィオ・フェッラーリによるヴァラッロ、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂「キリスト伝」連作について——視覚的着想源に関する考察——

竹内日瞳実（東京藝術大学）

ピエモンテ州ヴァラッロにあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂は、代替エルサレムとしての巡礼地サクロ・モンテの拠点に建設されたフランチェスコ会修道院聖堂である。聖堂内に設けられた、一般信者が出入りする身廊と修道士のための内陣とを分ける障壁(tramezzo)の全体には、画家ガウデンツィオ・フェッラーリ(c. 1480-1546)によって1513年までにキリスト伝が描かれた。各物語場面は古風な形式に従ってパネル状の枠組みで区切られ、《磔刑》を中心に《受胎告知》から《キリストの復活》まで、21の場面が展開されている。

ガウデンツィオはピエモンテの画家として、北イタリアの会則厳守派フランチェスコ会修道院聖堂における障壁装飾の伝統を守り、イヴレーアのサン・ベルナルディーノ聖堂の先例(1480年代、マルティーノ・スパンゾッティ作)と同数の枠組みで描き、主要な場面選択を踏襲している。一方で、聖堂内の絵画の様式的特徴から、それ以前にガウデンツィオが中部イタリアに旅行したことが、多くの評者によって示唆されてきた。しかしその明確な記録はなく、滞在時期についても意見が分かれているほか、参照したと考えられる作品も部分的な指摘にとどまっている。

本発表では、ガウデンツィオによる障壁装飾における人物造形や空間表現の発展を画家の中部イタリア旅行による成果と考え、視覚的着想源の整理および新たな分析から、旅行の時期や実態を推察したい。たとえばイヴレーアとヴァラッロの障壁に共通して夜景で描かれている《キリスト捕縛》では、人物が並列し簡潔なポーズをとる先例に対し、ガウデンツィオはより大きく多様な身振りや構図によって場面を一新させている。ペテロが大祭司に襲いかかる前景の描写は、他の物語場面と同様にデューラーの《小受難伝》との比較がなされているが、短縮法による人体描写はローマなど中部イタリア由来のものと考えられる。また、イヴレーアでは列柱の影が伸びる厳かな空間に設定された《ピラトの前のキリスト》で、ガウデンツィオは「ラオコーン」などのレリーフを描きこんで古代風の空間を演出しており、近年では概ね否定されているものの、画家が実際にローマでこの古代彫刻を見た可能性は捨てきれない。加えて特徴的なポージングなどフィレンツェやウンブリア地方での取材を推測させる要素も含め、新たな着想源を指摘するとともに、そこから中部イタリア旅行の実態をより具体的に明らかにしていきたい。

こうした分析により、甘美な人物表現から、堅牢な肉体表現への試みまで、ガウデンツィオはさまざまなアプローチをおこなっていることがわかる。加えてそれら人物像の効果的な動きや配置によって、画家はフランチェスコ会における「説教の視覚化」と解釈される各場面にさらなる活力と視覚的説得性を生みだし、観者の信仰への没入を促したのである。